

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02510

研究課題名(和文) 階層差からみる環境美学のダイナミズム 英口マン派と明治・大正日本の歩行文学比較

研究課題名(英文) Diverse Environmental Aesthetics Arising from the Class Differences: A Comparison between English and Japanese Romantic Walking Literatures

研究代表者

大田垣 裕子(Otagaki, Yuko)

兵庫県立大学・看護学部・教授

研究者番号：20290330

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：ヨーロッパでは18世紀末から各地に広がったロマン主義運動にともない徒歩旅行が革新的行動として芸術家や中流階層の若者たちの間で伝播していったが、それは近代化を急ぐ明治日本でも知識人たちにいち早く取り入れられた。本研究では特にロマン主義運動が顕著であったイギリスとその運動を受け継いだ日本における歩行文学を、これまで看過されてきた農民や職人たちの環境美意識にも焦点をあて、その言説を調査・比較し、そこにみられるロマン派的环境美学の継承とその独自性を地域差・社会階層差から検分することで、環境美学のダイナミズムを追究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、日本でもウォーキングは一般的な余暇活動となった。しかし、近代ヨーロッパや日本の歩行文化の歴史的・社会的発展過程を包括的に扱った文献は未だ刊行されていないことから、ロマン主義運動が特に活発であったイギリス、またその運動を受け入れたわが国における歩行文学の影響関係を考察し、その歴史的・文化的・社会的意義を明らかにした。さらに従来着目されることがなかった社会階層を検討対象に含めることで歩行文学にみられる環境美学の潜在的な意義を汲み取り、その社会的ダイナミズムの考究に繋がったことは、我が国の歩行文化を豊かにすることに寄与するばかりでなく、喫緊の環境問題を問い直す契機となった。

研究成果の概要(英文)：Pedestrian travels rose in Europe towards the end of the eighteenth century and it served as a levelling force among Romantic artists and middle-class young people. It spread quickly among Japanese intellectuals in the Meiji era, when Japan stopped its isolation policy. This research considered the characteristics inherited from Romantic works written in England, where the literary movement was the strongest, as well as the individual aspects seen in Japanese Romantic works. Comparing walking poems and essays written by English and Japanese Romantics including often overlooked labouring-class authors, this research aimed to investigate the diversity of environmental aesthetics arising from their class and national literary differences.

研究分野：英文学、環境文学批評、比較文学

キーワード：環境美学 階層差 イギリス・ロマン主義 明治・大正文学 歩行文学 比較文学 環境批評

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパの長い歴史の中で歩行による移動が楽しみと見做されるようになったのは約 200 年前のことであり、歩行文化の歴史も比較的新しい。イギリスにおいてはアン・ウォラスが 19 世紀イギリスにおける歩行の文化的、文学的意味を明らかにし、当時の刻々と変化する交通・農業・美学の文脈の中で生涯に 27 万キロを歩いたと言われる詩人ウィリアム・ワーズワス(1770-1850)やそれに続く作家たちの作品を読み直している。またロビン・ジャービスは徒歩旅行と余暇活動としての歩行が普及した 1790 年代に焦点をあてて当時の徒歩旅行者たちの精神性を分析し、その動機を次の 4 つに分類している。1 つ目は革新的な徒歩旅行者、馬車に乗らず、危険を冒しながら山や林を歩いて旅した芸術家や中流階層の若者たちである。2 つ目は先述の革新的な歩行が始まる前に、出現していた学術的徒歩旅行者である。この科学的成果と歩行文学作品の関係も見逃すことができない。3 つ目は 1790 年代に急速に増加したピクチャレスク趣味の徒歩旅行者たちである。彼らは馬車から降りて、絵画に描かれたような風景を求めて歩き廻った。4 つ目として賭けの対象となる徒歩競走者が挙げられる。

馬車に乗ってのピクチャレスク・ツアーは風景美観賞という主として視覚を通じての美的教育であったが、それに対してワーズワスなどロマン派の芸術家たちは自らの脚で歩き、五感で自然を捉える事を推奨した。ステーション(眺望点)という定点から絵のように自然景観をめめるのではなく、動点観測、つまり視覚ではなく聴覚や嗅覚も含めた触覚重視の事物の捉え方の重要性を自らの行動と作品によって訴えた。この視覚ではなく触覚の重要性をフランス革命の前に強調したのはフランスの思想家、芸術家のジャン=ジャック=ルソー(1712-1778)であった。ルソーの小説『新エロイズ』刊行以来、小説に描かれた世界を追体験しようとする多くの読者がアルプスを訪れるようになった。ルソーの自然観、芸術観が当時のヨーロッパの知識人たちに与えた影響は非常に大きい。歩行文化においても例外ではない。研究者は本研究開始前にすでにルソーとイギリス・ロマン派の歩行文学を代表するワーズワスに焦点を当て、「ワーズワスにおけるウォーキングとライティング イギリス徒歩旅行普及期考」(『プール学院大学研究紀要』第 50 号)においてその影響関係を考察していた。さらに、農民のアン・ヤーズリー(1751-1806)の“Clifton Hill”と中流階層出身のカーク・ホワイト(1785-1806)の“Clifton Grove”の歩行詩の比較に基づき、異なる社会背景を持つ詩人たちの作品にみられる周りの自然や人物の描写とピクチャレスク美学との関連、自然に対する感受性、孤独な歩行が詩人たちにもたらす効果、そして詩人たちの上昇志向を突き合わせた考察結果を所属学会にて報告していた。

一方、急速な近代化をとげた明治日本でも歩行運動はその思想的背景、実利的目的を含めてまず知識人たちから受容されていった。研究者には明治以降の近代文学作品の中で歩行を大きく取り上げた作家たち、国木田独步(1871-1908)や夏目漱石(1867-1916)の作品についての論考、「「武蔵野」再考 歩行文学の系譜」(『プール学院大学研究紀要』第 52 号)、「「二百十日」論 鍛冶屋の山歩き」(『プール学院大学研究紀要』第 54 号)、「「空知川の岸边」近代ヨーロッパ歩行文学の流れに沿って」(『プール学院大学研究紀要』第 55 号)があった。また、島崎藤村(1872-1943)の『千曲川のスケッチ』における近代ヨーロッパ歩行文化の受容に関する口頭発表「Toson's Chikuma River Sketches and Its Historical Background of Modern European Pedestrian Literature」(Romantic Connections)およびカナダと日本の歩行文学パネル参加「Japanese Walking Literature in the Meiji Era and Its Romantic Aspects」(ACCUTE)があった。パネルではヨーロッパの知識人たちの間で醸成された歩行文化の日本における受容、またカナダの都市や郊外、日本の郊外や田舎における歩行活動の革新性を議論した。その他、歩行と文学、文学とエコ・ツーリズム、文化と自然の関係など、すでに 10 件程度の関連テーマについての研究業績があった。

2. 研究の目的

近年、日本国内でも健康あるいは新しい視点や感じ方のヒントを求めて日常的に歩く人が増えている。本研究では徒歩旅行が盛んになったイギリス・ロマン主義時代とその伝統を継承した明治・大正日本の歩行文学をその時代的・文化的背景を調査・比較・考察することで我々の歩行文化をさらに豊かにする知見を得ることを目指した。また、上述の歩行文学に関する調査・考察をさらに推し進め、中流階層出身の作家と農民・職人等社会階層の違う作家の言説および、イギリスと日本の作家の言説の比較に焦点を当てて資料を渉猟し、作品の舞台となった地域の実地調査、国内外の学会等で口頭発表による意見交換を行いながら、それぞれの社会階層と地域における言説を比べ、その類似性と独自性を検分し、そこに見られる環境美学の潜在的な意義を汲み取り、人間が地球の生態系や気候変動に大きな影響を及ぼすようになった時代に求められる環境美学の社会的ダイナミズムを考究することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、異なる社会階層・地域出身の作家の手になる主として歩行文学に描出される環境への美意識「環境美学」を吟味し、階層・地域による言説上の相違を考証するため、期間を 3 年間とし、3 つの時期に分けて、本研究者単独で進めた。(1)平成 29 年度から令和元度前半は近代イギリスの歩行文学・文化について資料調査・現地調査と日本国内のテーマ関連資料調査による情報収集および研究成果の報告、国内外の学会等での意見交換による議論を主として行った。

(2) 平成30年度から令和元年度にかけて、引き続きイギリス関連の資料調査・現地調査、日本関連の資料調査、それに加えて日本国内の現地調査、研究成果報告、意見交換を行った。(3) 令和元年度後半はこれまでに得た資料・情報を基に、各々の階層・地域の歩行文学・文化の類似点と相違点を吟味し、その影響関係を考察し、議論の精緻化を図った。

(1) 平成29年度 令和元年度前半

近代イギリスおよび日本の歩行文学・文化の資料収集・整理、イギリスでの現地調査による情報収集、研究成果の報告、意見交換等を主としてロマン主義時代の歩行文学の代表であるワーズワス、ミルクメイド詩人のアン・ヤーズリーとジャネット・リトル、農民詩人のロバート・ブルームフィールドと宮沢賢治を対象にして行った。これらの作家たちの作品における自然に関する言説上の地域差、階層差、個人差、社会経済的背景を念頭に置き、そこに描出される環境美学を考察した。

(2) 平成30年度 令和元年

近代イギリスの歩行文学・文化関連については、前年度に引き続きブルームフィールド、また、学術的徒歩旅行者であったギルバート・ホワイトの資料調査・現地調査を実施した。ブルームフィールドの作品にみられるピクチャレスク美学の伝統の継承とその独自性について考証した。ホワイトの『セルボーンの博物誌』(1788)はリチャード・メイベイによればこれまでに英語で書かれた本で4番目に出版部数が多いという。彼の著作に表された環境思想がいかにロマン主義時代の詩人たちに影響を与えたかを検討した。明治・大正日本の歩行文学・文化の資料調査については特に藤村と賢治、また現地調査については賢治と独歩を中心に実施した。

(3) 令和元年後半

これまでに得た資料・情報を基に、イギリス・ロマン主義時代の詩人と明治・大正日本作家の歩行文学にみられる環境美学において認められる差異を歴史的・文化的・地理的背景や作家の出身社会階層の視点から検分し、「環境美学」が異なる地域・社会階層に属する人々による言説上、またはそれらの人々に関する言説上で異質なものとして立ち現れることを検証した。歩行詩に表れる中流階層の環境美学を軸に、複数の農民・職人詩人たちの手による、またはそれらの人々に関する作品に示される環境美学を比較・考察し、従来、看過されてきた階層の人々にとっての環境美学の位相を考察した。

4. 研究成果

(1) 平成29年度は、イギリス・ロマン主義時代の歩行文学の代表であるワーズワスと日本・大正時代の宮沢賢治の主としてパストラル作品を比較し、作中に表されている環境感受性や社会批判、聴覚イメージにより引き起こされる身体感覚と歩行運動のリズムとの関連性を考察し、『Wordsworth and Kenji Miyazawa: Pastoral Walks』という題で第46回ワーズワス国際学会のパネルで発表した。イギリス・ロマン主義時代の農民・職人詩人口バート・ブルームフィールドについて彼の作品、『Farmer's Boy』(1800)および『Shooter's Hill』(1806)の舞台となったサフォーク州 セットフォードとグリニッジ・ロンドン特別区で現地調査を行い、作中で描出されている景観の確認と作品解釈の鍵となる地誌的情報等を入手した。また、第175回関西コーレルリッジ研究会での「ミルクメイドの歌声 クラス、ジェンダー、ナショナルリティーから聴く」の発表ではアン・ヤーズリーとジャネット・リトルという、2重、3重に抑圧されていたイギリスとスコットランドの2人のミルクメイドの手になる作品についてクラス、ジェンダー、ナショナルリティーの観点から環境への感受性を様々に検分することで、世界が提示する多様性に統一を与えられない、あるいはあえて統一を与えないという彼女たちのスタンスがいかに、第二次世界大戦後格差が拡大しつつある世界において求められる環境美学のダイナミズムを考察する契機となりうるかを論じた。

(2) 平成30年度は、農民・職人詩人口バート・ブルームフィールドの眺望詩『ワイ川の岸边』におけるピクチャレスク美学の継承とその独自性・革新性を考察し、『The Four Songs in Robert Bloomfield's The Banks of Wye: "Truth and Tradition's Mingled" Strains』という題で第47回ワーズワス国際学会において発表した。ブルームフィールドの上述の作品の舞台となったワイ川流域で現地調査を行い、作中で描出されている景観を確認し、作品解釈の鍵となる地誌的情報および関連資料等を入手した。ピクチャレスク的景観では人の気配は後景化されるが、作中には土地の農民の様子、古城をめぐる迷信、川面に映る麦畑などが書き込まれている。ロマン主義時代の社会変容や自然観を歴史的視点で捉え直すことで、作品の革新性、先見性を認識した。日本国内では宮沢賢治の「秋田街道」、「小岩井農場」の舞台である岩手県にて現地調査、関連資料収集を行い、作品に表される自然観、社会批判を読み解く手がかりを得た。また、前年度から継続して、アン・ヤーズリーとジャネット・リトルというイギリスとスコットランドの2人のミルクメイドの手になる作品における環境への感受性を検分し、彼女たちが提示する世界観が環境美学のダイナミズムを考察する契機となりうることを「ミルクメイドの歌声 クラス、ジェンダー、ナショナルリティーから聞く」(『文学と環境』ASLE-Japan)で論じた。さらに学術的徒歩旅行者がもたらした科学的成果とロマン派歩行文学作品の関係を当時の啓蒙思想における地学・人類学の枠組みから検証し、牧歌がいかに革命へとつながっているかについて、「ギルバート・ホワイトとワーズワス 牧歌と革命」(第44回イギリス・ロマン派学会全国大会シンポジウム「ロマン主義とナチュラル・ヒストリー 越境する精神」2018年10月)において発表した。

(3) 令和元年は、イギリス・ロマン派詩人で中産階層のウィリアム・ワーズワスと同時代の農

民詩人のアン・ヤーズリーの歩行詩において、牧歌の特質と歩行がもたらす文学的創造性について吟味するとともに、詩中に読み取れる近代化・資本主義批判について検討し、“The Romantic Pastoral: Shepherd and Milkwoman Walks” という題で第48回ワーズワス国際学会において発表を行った。また、関西コールリッジ研究会第183回例会では「クリフトンの歩行詩再考 アン・ヤーズリーとカーク・ホワイト」という題で、やはり同時代のヤーズリーと年少詩人カーク・ホワイトの歩行詩に登場するミルクメイドの描かれ方や、詩人たちそれぞれが生まれ育った土地の動植物や風景に対する姿勢、ピクチャレスク美学との関連、そして詩人たちの上昇志向・社会批判を突き合わせて社会的経済的背景を視野に入れながら比較することにより、産業革命以降の人間が環境に与える負荷が大きくなった時代における自然や社会の構造的類似性に気づかされることを指摘した。今年度も昨年度に引き続き明治・大正日本の歩行文学について、特にその作品の中で歩行を大きく取り上げた独歩、漱石、藤村、賢治に焦点をあて関連の資料の収集・精査を進めた。さらに上述の作家のうち特に独歩の足跡をたどり、「武蔵野」の舞台となった該当地域の歴史、文化、地勢、景観等についての現地調査を行い、独歩の作品に表れる革新性について吟味した。

以上の通り、これまでの環境批評では取り上げられなかった環境美学的ダイナミズムを地理的、社会的、文化的文脈から考究した。令和元年度後半はこれまでに得た資料・情報を基に、それぞれの地域・階層の歩行文学・文化の類似点と相違点を吟味し、その影響関係を考察し、議論の深化、精緻化を図った。イギリス・ロマン主義時代の詩人と明治・大正日本作家の歩行文学に見られる環境美学において認められる差異を歴史的・文化的・地理的背景や作家の出身社会階層から論ずれば、「環境美学」が異なる地域・社会階層に属する人々による言説上、またはそれらの人々に関する言説上で異質なものとして立ち現れることを検証した。そして歩行詩に表れる中流階層の環境美学を軸に、複数の農民・職人詩人たちの手による、またはそれらの人々に関する作品に示される環境美学を比較・考察し、従来、看過されてきた階層の人々にとっての環境美学の位相を探り、喫緊の環境問題の解決につながる自然と人間の関係性について再検討したことで、新たな環境文学批評の意義を確認することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大田垣 裕子	4. 巻 44
2. 論文標題 (Review) 『トランスアトランティック・エコロジー ロマン主義を語り直す』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 イギリス・ロマン派研究	6. 最初と最後の頁 74-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大田垣 裕子	4. 巻 21
2. 論文標題 「ミルクメイドの歌声 クラス, ジェンダー, ナショナルリティから聞く」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文学と環境	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大田垣 裕子	4. 巻 43
2. 論文標題 (Proceedings) 「ギルバート・ホワイトとワーズワス 牧歌と革命」、シンポジウムロマン主義とナチュラル・ヒストリー 越境する精神	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 イギリス・ロマン派研究	6. 最初と最後の頁 53-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.18986/eer.43.0_47	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 大田垣 裕子
2. 発表標題 クリフトンの歩行詩再考 アン・ヤーズリーとカーク・ホワイト
3. 学会等名 関西コールリッジ研究会第183回
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大田垣 裕子
2. 発表標題 The Romantic Pastoral: Shepherd and Milkwoman Walks
3. 学会等名 The 48th Wordsworth Summer Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大田垣 裕子
2. 発表標題 The Four Songs in Robert Bloomfield's The Banks of Wye: "Truth and Tradition's Mingled" Strains
3. 学会等名 The 47th Wordsworth Summer Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大田垣 裕子
2. 発表標題 ギルバート・ホワイトとワーズワス 牧歌と革命、シンポジウム ロマン主義とナチュラル・ヒストリー 越境する精神
3. 学会等名 第44回イギリス・ロマン派学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大田垣 裕子
2. 発表標題 Wordsworth and Kenji Miyazawa: Pastoral Walks
3. 学会等名 第46回ワーズワス国際学会 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大田垣 裕子
2. 発表標題 ミルクメイドの歌声 クラス、ジェンダー、ナショナリティーから聴く
3. 学会等名 第175回関西コールリッジ研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>(書評)レベッカ・ソルニット『迷うことについて』(「未詳の青を求めて 失われることへのフィールドワーク」)東辻賢治郎訳 左右社『図書新聞』(令和元年11月9日、3422号)(依頼有)</p> <p>(文学・環境学会ニュースレター全国大会報告)五月女颯「ヴァジャ=プシャヴェラ「蛇を喰う者」における死の贈与」</p> <p>(書評)ソルニット『ウォークス 歩くことの本質』(「読むことは歩くこと ワンダーラスト<さまようことへの渴望」)東辻賢治郎訳 左右社『図書新聞』(平成29年1月13日、3334号)(依頼有)</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考